始

青光
七卷第二號

第七卷第三號目次

後宇多天皇宸翰弘法大師傳(其二)	京都大覺寺藏
弘法大師眞蹟聾瞽指歸(其三)	紀伊金剛峯寺藏
道風朝臣筆秋萩帖(第廿四紙)	有栖川宮家御藏
佐理卿筆筋切(原寸)	名古屋關戸守彥君藏
行成卿筆歌仙家集切(原寸)	東京冷泉伯爵家藏
宗尊親王御筆催馬樂(原寸、其一)	東京鍋島侯爵家藏
龜田鵬齋新年書簡(原寸)	東京大槻文彥君藏
龍沙闕賓の三	
北魏　護身命經(原寸)	東京中村不折君藏
張即之眞蹟金剛般若波羅密經(其二)	京都智積院藏
方震孺眞蹟直隷鳳陽府詞書(縮寫)	東京內野皎亭君藏
舊拓史晨碑(其十一)	東京中村不折君藏
舊拓晉祠之銘(其七)	東京中村不折君藏
蘇東坡草書後赤壁賦(其三)	東京菊池晉二君藏
澤庵禪師贊松花堂筆布袋圖(縮寫)	東京吉田丹左衛門君藏
王麓台筆南山積翠圖(縮寫)	東京內野皎亭君藏

開巖之辭	
書法十二意	滑川澹如
書學鑑世論	樋口銅牛
多聞室叢談(二)	物　人
北京武英殿の寶物(續)	後藤朝太郎

前號所載目次

後宇多天皇宸翰弘法大師傳(其一)	京都大覺寺藏
弘法大師眞蹟聾瞽指歸(其二)	紀伊金剛峯寺藏
道風朝臣筆秋萩帖(第廿三紙)	有栖川宮家御藏
行成卿筆朗詠切	名古屋關戸守彥君藏
西行法師筆白河切	尾張森川勘一郎君藏
僧妙素眞蹟唱和集	京都南禪寺藏
大宰春臺及服部南郭書簡	東京市島謙吉君藏
龍沙闕賓の二	
北魏　大般涅槃經卷十五	東京中村不折君藏
張即之眞蹟金剛般若波羅密經(其一)	京都智積院藏
明拓石鼓文(其六)	支那李芝陔君藏
儀徵阮重撫天一閣石鼓文本(其六)	
舊拓史晨碑(其十)	東京中村不折君藏
蘇東坡草書後赤壁賦(其二)	東京菊池晉二君藏
渡邊崋山自畫贊(縮寫)	東京吉田丹次郎君藏

解説

●後宇多天皇宸翰弘法大師傳(第七巻第二號解說參照)

●弘法大師眞蹟聾瞽指歸(第七巻第一號解說參照)

●道風朝臣筆秋萩帖(第三巻第六號解說參照)

釈文

幾耳毛美無難安加
春久禮奈者
安羅堂末能東新也
川美氣無之能不久散
也登耳者々也久於比
爾志母乃遠
雲久悲春耳堂能美
波々也久有都之天幾

●佐理卿筆筋切

古筆家が佐理卿筆筋切または通切と稱するは、古今集上下二帖の下の方(巻十一より巻二十まで)の離散したるものにして、曾て本誌第二巻十號に掲げたる原氏所藏のもの、又第六巻一號に載せたる田中氏所藏のもの、其の他諸家に藏する所のものは皆その斷片なり。而して上の方、序文より巻十まではは揃ふて蝴蝶綴の一帖となり、古筆の鑑賞家として聞えたる名古屋の關戸守彦氏現にこれを藏せり。

此の用紙は鳥の子にして、當時記錄歌合等に用ゐたる料紙を二つに截ちて縦に用ゐたるなれば、元來銀泥もて横に引きたる線の縦線となり、謂ゆる筋切と稱するものあり、また篩の目の如き形あるもの、謂ゆる通切と稱するものあり中には蝶鳥の模樣ある所あり、或は羅紋のある所あり、一帖すべて百五十五枚、其のめでたさ云はんかたなし。

本號に掲げたるは、卽ち此の帖中の一片にして、巻七賀の部の一節なり。(天風生)

釈文

しほの山さしでのいそにすむちどり
きみがみよはやちよとぞなく
吾よはゐ君がや千よにとりそへて
とゞめおきてはおもひいでにせよ
遍照僧正に七十の賀せさせつとて　仁和帝
かくしつゝとにもかくにもながらへて
きみがやそぢにあふよしもかな
おなじ帝の親王におはしま
しける時おばの八十賀にしろ
かねの御つゑせさせたまへけるに
おばにかはりて　僧正遍照
ちはやふる神やきりけんつくからに
ちとせのさかもこえぬべらなり
堀河の大まふちきみの四十の賀
九條の家にてしける日

●行成卿筆歌仙家集

これは歌仙家集中の異本躬恒集にて、筆者は行成卿なりといへども、ところによりては、道風朝臣筆の敦忠集切にいとよく似たるところもあり、はじめよりをはりまで女房消息のやうに、しどけなく散らしがきにしたるさま、かぎりなくなつかしき冊子なり。料紙は白き薄樣にて、ところどころに雲紙を交せて綴ぢたる蝴蝶帖なり。奥に

かみけがしにもとは、おまうたまへながら、いなびじとかや、又なからむのちのと方々に、おもひさぶらひてこそ、

みづぐきのあとかきつくるしるしには
ながれてさぞとおもひいでなん

と書きつけられたり。思ふに道風行成の時代を距ること遠からざるころほひ、ある老女房が、うからに乞はれていなびがたさに筆とりけむものとは、この奥書によりておしはかられたり。かの本願寺本の躬恒集の筆者といふ承香殿女御などのたぐひにて、世にすぐれたる能書のすさびなるべし。いま此の筆者を誰ともさだかにしるよしなきこそ、かぎりなく口惜しけれ。(周魚記)

●宗尊親王御筆催馬楽

世に催馬樂の古寫本はあれど、この帖を最古のものといふべし。料紙は道風朝臣筆の小島切とおなじさまなる飛雲紙にて、四半三十五枚の蝴蝶帖なり。書風は前田侯爵家藏の永承五年の歌合の卷といとよく似たれば、これを宗尊親王の御筆といふは、さる事なれど、その料紙といひ、書風といひ、すべて八九百年前のものとおぼし。前田侯爵家藏の傳公任卿筆の北山抄、圖書寮御藏の文館詞林の裏書などと必ず其の時代を齊しうするものなるべし。舊桂宮御藏にて、今は帝室御物なる萬葉集第四卷、又帝室御物なる傳行成卿筆の卷子朗詠など、全く系統を同じうせる書風にて、結構嚴正、筆路優麗、品位最も高きものといふべし。本號に掲げたるは、新年の一曲にて、

あたらしきとしのはじめに、かくしこそ
つかへまつらめ、よろづよまでに。

といふ短歌に、はれ、あはれそこよしや、などの囃子詞を添へたるは、催馬樂といふ樂曲の例なり、句間に細字にて、以、安々、於々と書けるは聲永く引く譜にて、傍に百、百と書けるは、拍子の略符なり。

なほ現存の樂譜との異同、催馬樂傳來の事實等に就きて、考證せまほしき事多かれど、時歳末に當りて、其の意を果すこと能はず、他日補足する時あるべし。(周魚記)

●龜田鵬齋新年書簡

醒來飲酒醉來眠、此法不仙又不禪、百兩黃金何可換、從來此是我家傳、と醉吟して、詩酒の間に放浪したる龜田鵬齋は純粹の江戸儒者なり。名は長興、字は穉龍、幼より學を好み、井上金峨の門に入りて學びたれども、性豪邁にして人に下るを欲せず、同門の士山本北山・原狂齋等と共に、力を盡して蘐園の一派を排擊し、江戸の文風これが爲めに一變するに至れり。而して翰墨場裡に於ける鵬齋は、當時挺然として儕輩を拔き、殊に晩年良寛上人の書を見るに及んで、天下また此の如き妙手あるかと三嘆して、一層の工風を臨池に致し、遂に法象の外に其の妙を極むるに至れり。

此の書畫は書蹟の年齡㡧に過ぎざれども、また以て鹽香の面影を偲ぶに足るべし。（天風生）

●龍沙開寶（紙本竪一幅）

古人筆蹟の研究資料として孔固亭の經營を開き、本誌第七巻第一號には、晉人及び隋人の寫經を併載し、また第二號には、北魏時代に成れりと推定すべき涅槃經を揭げたるが本號に登載したる護身命經も亦北魏人の手に成れるものなり。試に本經の奥書を見よ『正光二年十二月十五日、信士張阿宜寫護身命經、受持讀誦、供養經、上及七世父母、下及己身、普蒙吉時之福』と明記しあり。正光二年は實に北魏孝明帝の治世なれば、書者の張阿宜なるもの、魏人たること復た爭ふべからざる也。而して之を他の寫經に比較するに全く其の趣を異にし、書風に一點の俗氣を存せざるところ頗る珍重すべきを覺ゆ。（天風生）

●張即之眞蹟金剛般若波羅蜜經（紙本竪一幅）

●方震孺七律兵殺軸

方震孺字孩未、桐城の人。萬曆四十一年進士。沙縣の知縣より入て御史となる。熹宗位を嗣ぐに及むで、逆璫魏忠賢客氏と結び威福を擅ふす。直聲朝廷に震ふ。既にして遼陽破れ、三岔河以西四百里、人煙斷絶し、軍民奪く竄し、文武將吏一騎の東するものなし。震孺一日十三疏、帑金を發して師を犒はむことを請ふ。詔して之を許す。卽ち自ら闕を出で、死を弔し傷を救ひ、上疏攻守の策を陳す。帝震孺に命じ、遼東を巡按し、軍事を監紀せしむ。震孺の遼を按するや、居は鎧せず、食は火せず。軍令嚴肅たり。然れども諸將和せず。巳にして潰兵三岔河を渡る。部將咸な走る。獨り震孺の軍動かざること山の如し。是の時に當りて、西平の守將羅一貴巳に戰死し、參將祖大壽殘兵を擁して覺華島に駐る。震孺乃ち水師の將張國卿と相謀て曰く、今や東師糧に乏し。聞く島上米豆二十萬石、兵千餘萬人あり、器仗馬牛も亦た無數なりと。東師卽ち島兵と藉し、以て檢國を攻めば、以て遼ふすることを得べしと。國卿と海に航して大壽に見へ、慷慨踊て曰く、將軍踊すれば相保つに富貴を以てすべし。若し踊せずんば、震孺請ふ頸血を以て將軍の衣に濺がむと。大壽泣き、震孺も亦た泣き、遂に相携へて以て歸る。軍民帽頂を得る靠なし。時に主事徐大化なるものあり、魏閹の黨なり。震孺が驟亂を劾す。時に大鋒を以てし、獄に繋せらる。忠賢廣く大獄を興し、震孺を羅して罪に陷れ、崇禎帝位を嗣ぎ出獄するに、大赦を以てぎ轉ちるゝことを得たり。凡年復陞壽州を知す。震孺士民を撫して固守す。賊是より敢て壽州に逼らず。壽州の惡蕃史可法其の功を上る。用て廣西の參議となし、尋て右僉都御史に擢でられ、廣西に巡撫たり。京師陷り、福王南京に立つに及むで、卽日拜疏して勤王す。姦臣馬士英阮大鋮之を憚り、辭して險に還らしむ。震孺更に憤々憂憤して卒す。其の忠義壯烈實に甲申殉難の諸士に讓らず。此の幛軸書法遒健、詩調雅正、元帝道開と相頡頏して譲らざるものといふべきなり。（澄如道人）

●蓄拙史晨碑（紙本竪一幅）

●蓄拙晉祠之銘（紙本竪一幅）

●蘇東坡草書後赤壁賦（紙本竪一幅）

●澤庵禪師贊松花堂筆布袋圖

佛法よりして書法の自在三昧に悟入し、寛永三筆の隨一と稱せられたる松花堂昭乘は、丹青の道に於ても亦實に一大名手たり。初めは山樂山雪に就て學びしが、後には因陀羅牧溪の畫風を好み、日夜工夫を凝らして遂に其の妙を極むるに至れり。また澤庵禪師は同時代の大智識にして、一たび大德に出世したれども、住山三日、退鼓を撾つて泉南に退り、之れが爲めに羽州に貶せられて謫居四年、後ち將軍家光の聘に應じて萬松山東海寺を剏めたる高僧なり。本號に縮寫登載したる吉田君秘藏の横幅は、乃ち此の名人の手に成れる布袋の圖に、此の高僧が『一笑開口弄雙童、童子無心布袋中、內院人今在于此、秋風寥廓率陀宮』の七絶を贊せられたるもの、其の畫の高雅にして其の贊の至妙なる、今更ら兎角の評を加ふるの要なく、洵に珍襲すべきの逸品たるを覺ゆ。（天風生）

●王覺斎南山積翠圖軸

王原祁字は茂京、麓臺と號す。王煙客太常の孫、康熙庚戌進士。知縣より給事中に擢でられ、侍講學士に改められ、內廷に供奉し、佩文齋書畫譜館總裁に充てられ、戸部侍郎に晉む。夙に家學を講じ、六法を以て當時に獨絶す。時に虞山に王石谷あり、婁東の學を以て聲價中外を傾く。太常石谷を其の畫學館に延き、事ふ所を傾けて之に授ゆ。麓臺亦た日夕相其に研讚し、互に議論して相要する所鮮なからず。論者いふ、石谷は淸麗を以てし、麓臺は高曠を以て上下頡頏すと。麓臺家學を講げ、眞一筆に務力する所多きも、而かも畫法の爲めに牽せられず、家法の爲めに又た牽せられず。卓然一家、渾逸の趣を備す。之を書法に譬ふれば、恰かも顏魯公の書き也。此の南山積翠圖、一峯老人に做ふものにして、最も高宗得意の作たるを疑はず。款にいふ、乙未嘉平之を作ると。乃ち其の死乙未を溯る十三年前にして先生六十一歲の作。渾然圓渾、眞に千歲を睥睨して敵なき時となす。（澄如跋）

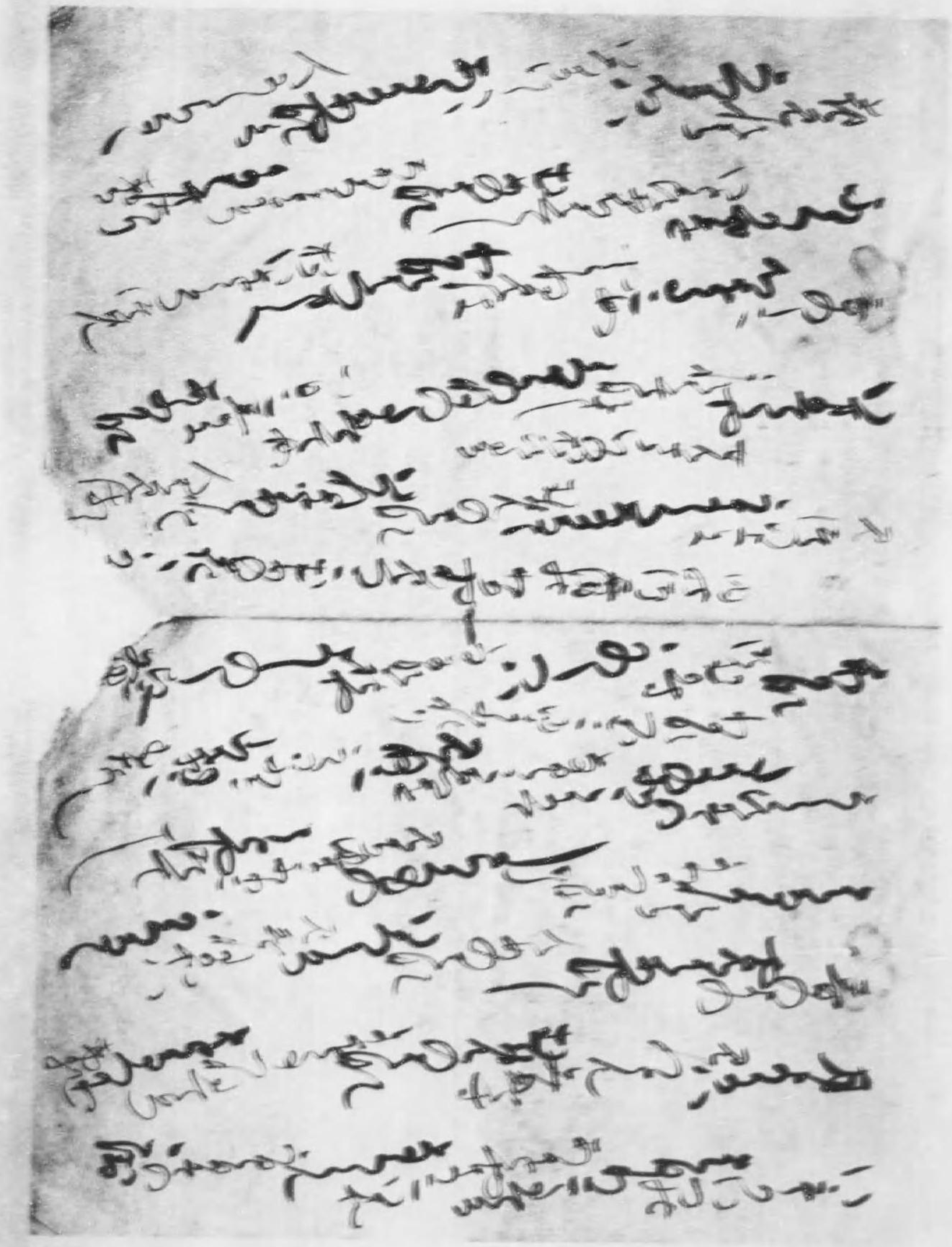
播感得大毗盧遮那經於日本國高市
郡久米東塔下方慶海大願於是萌中
心慕是和尚論意之加持三藏師資之
因由乎遂乃延曆廿三年飛錫於
棹浦之波路交親於青龍之房乃
和尚告曰　四重也播秘密之奧也東生入漢
宜學久了吾生前去也先授金剛杵
卜南山勝地則以大同元年歸朝請錄
請來秘教上表以聞自爾以降一人三公
搢武驚歎四衆萬民稽首歸依神
泉祈雨神龍現形金闕宸居金色
放光或日輪夜照猶在于途難思加持力
非理所測弘仁十四年勅給東寺永為密
教場帝經四朝奉為國家建壇修法五十一

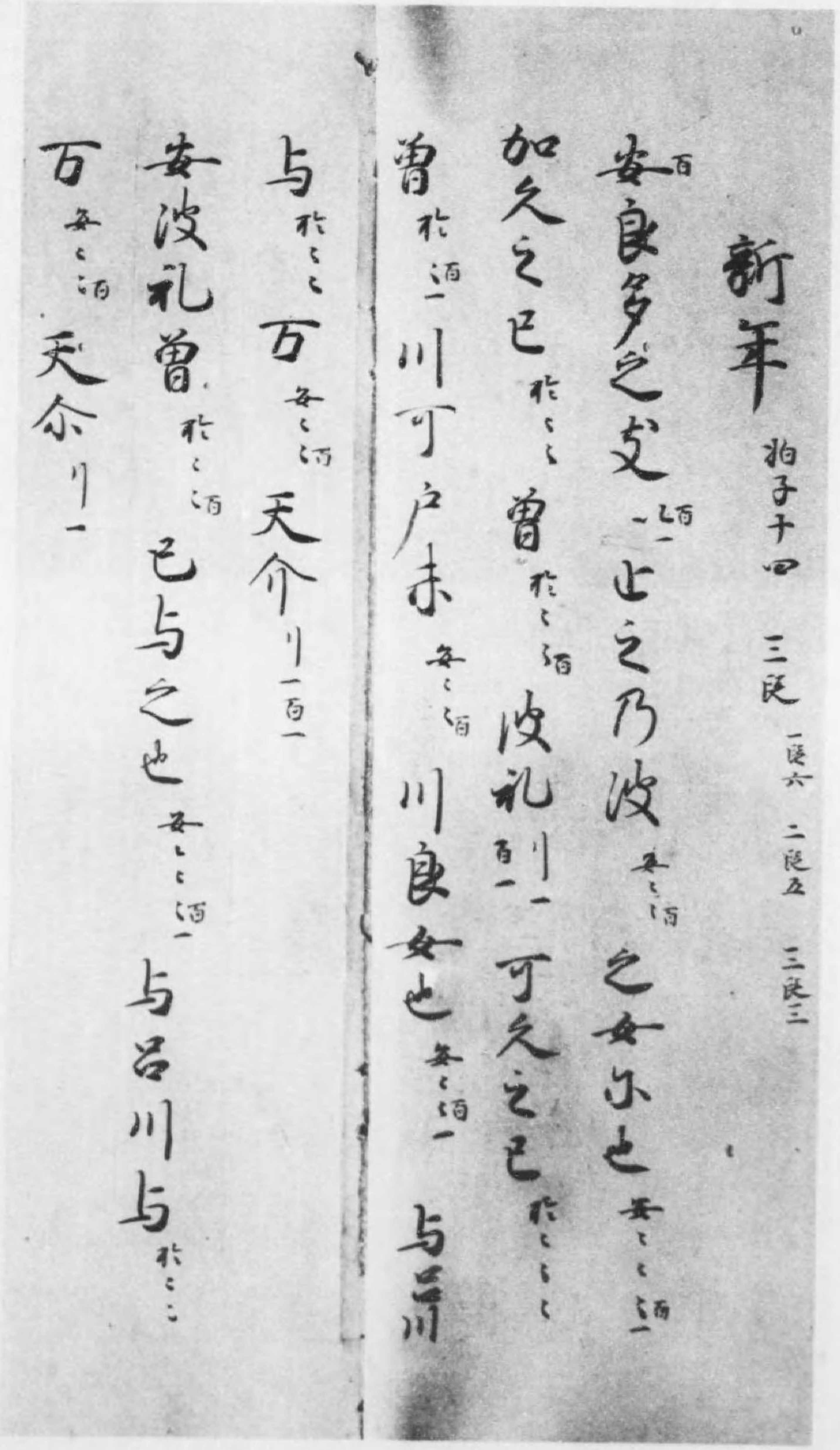
歡意旦暮策憶故將棄彼所
也之文作此言志之義請
龜毛以為儒客氣兔角
而從二三人訪盧山士張入道
者屬假名既亦出世趣俱
陳楫戰並誨輕公蒙亦蹋
發潰思瘖之膿陽淩陽
句鏗龍中之鳴勒成一卷
名曰聲譜指歸但恐翔
鳳之下雖頻鏘翼霹靂
之中致響不息非慰夏鐘
之見闚但將郭處之知己耳
作望若有握卷解倚之人

武可し乃美堂難安加
春久礼奈ゐ
安羅堂末丹东新也
川美ゝ家葉ゝ多丹ふ久枚
世止乎りし㐂ゝ也し久雑比
乍生心母乃遠
雲天心美下し堂末丹天
波ゝ也し久末年路ゝしゝ

しほの山さしでのいそにすむちどり
きみがみよをばやちよとぞなく
我よはひきみがやちよに(そち)とりそへて
とゞめおきてはおもひいでにせよ
遍照僧正に七十の賀たまひける時　仁和帝
とよし
かくしつゝとにもかくにもながらへて
きみがやちよにあふよしもがな

仁和帝の親王におはしましける
時御をばの八十賀にしろかね
を杖につくれりけるを見てかの
御をばにかはりてよみける　僧正遍照
ちはやぶる神やきりけむつくからに
千とせのさかもこえぬべらなり
堀河のおほいまうちきみの四十の賀
九条の家にてしける時によめる





新年　拍子十四　三段　一段六　二段五　三段三

安良多之支止之乃波之女尓也

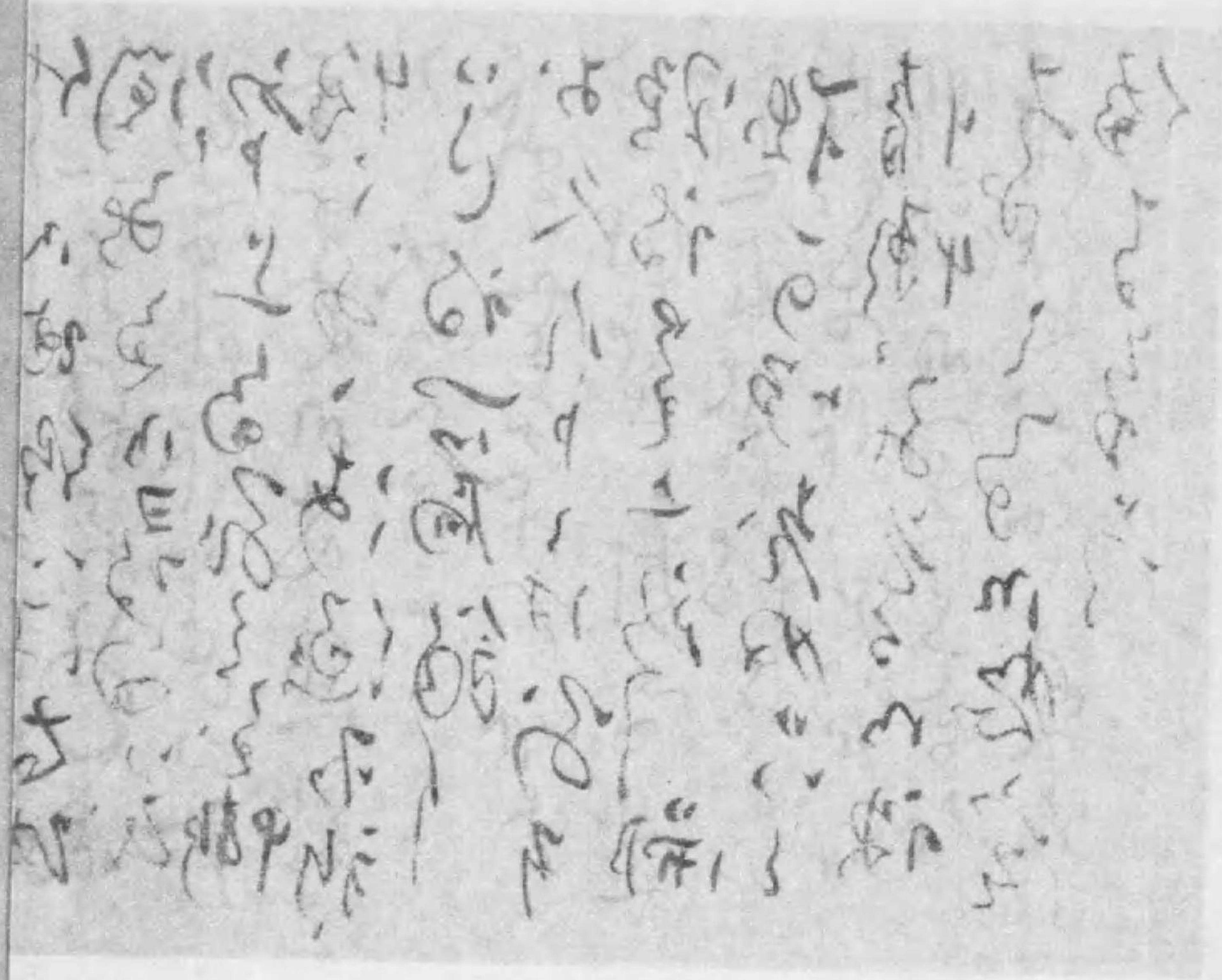
加久之巳曽波礼利可久之巳

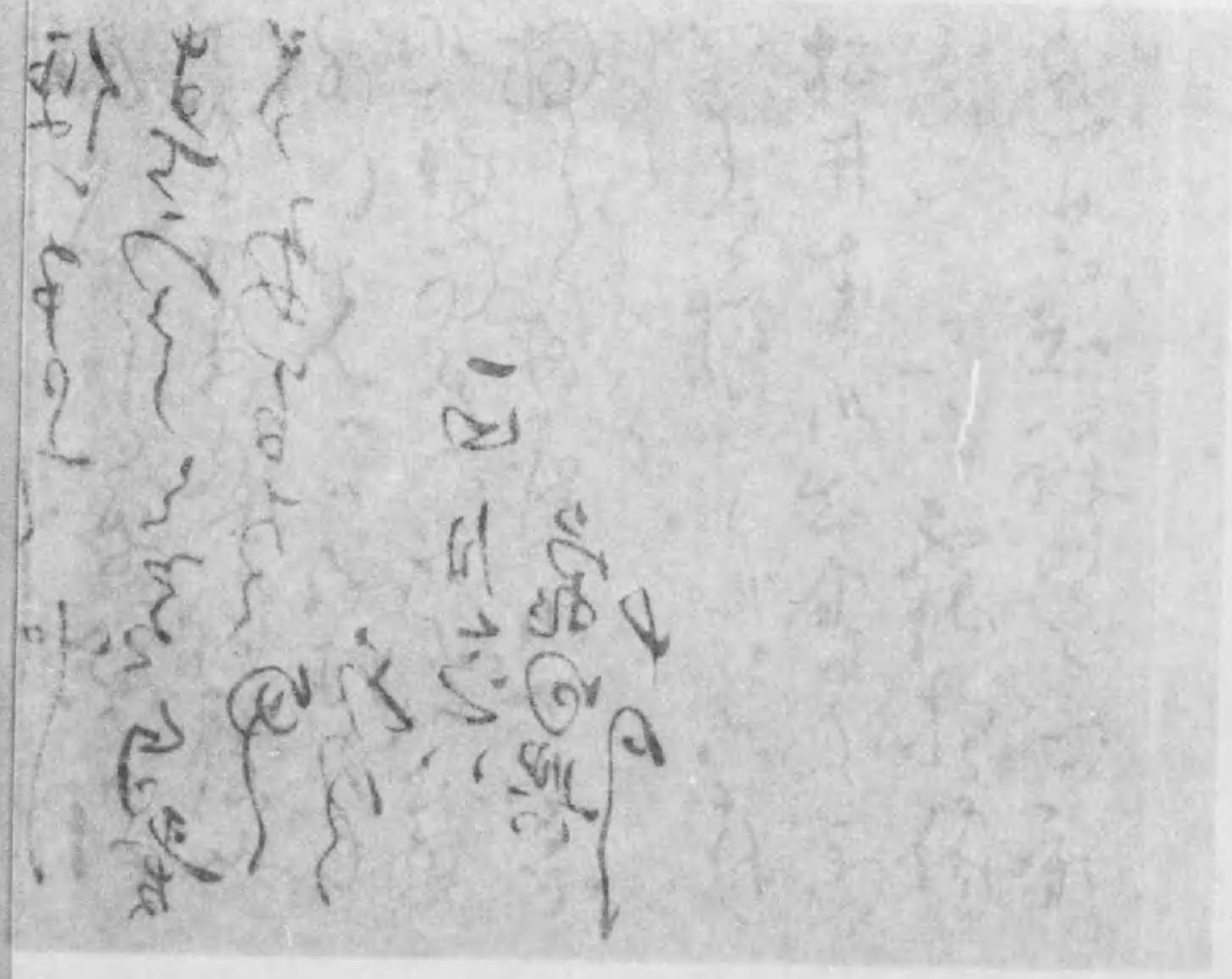
曽川可戸未川良女也与呂川

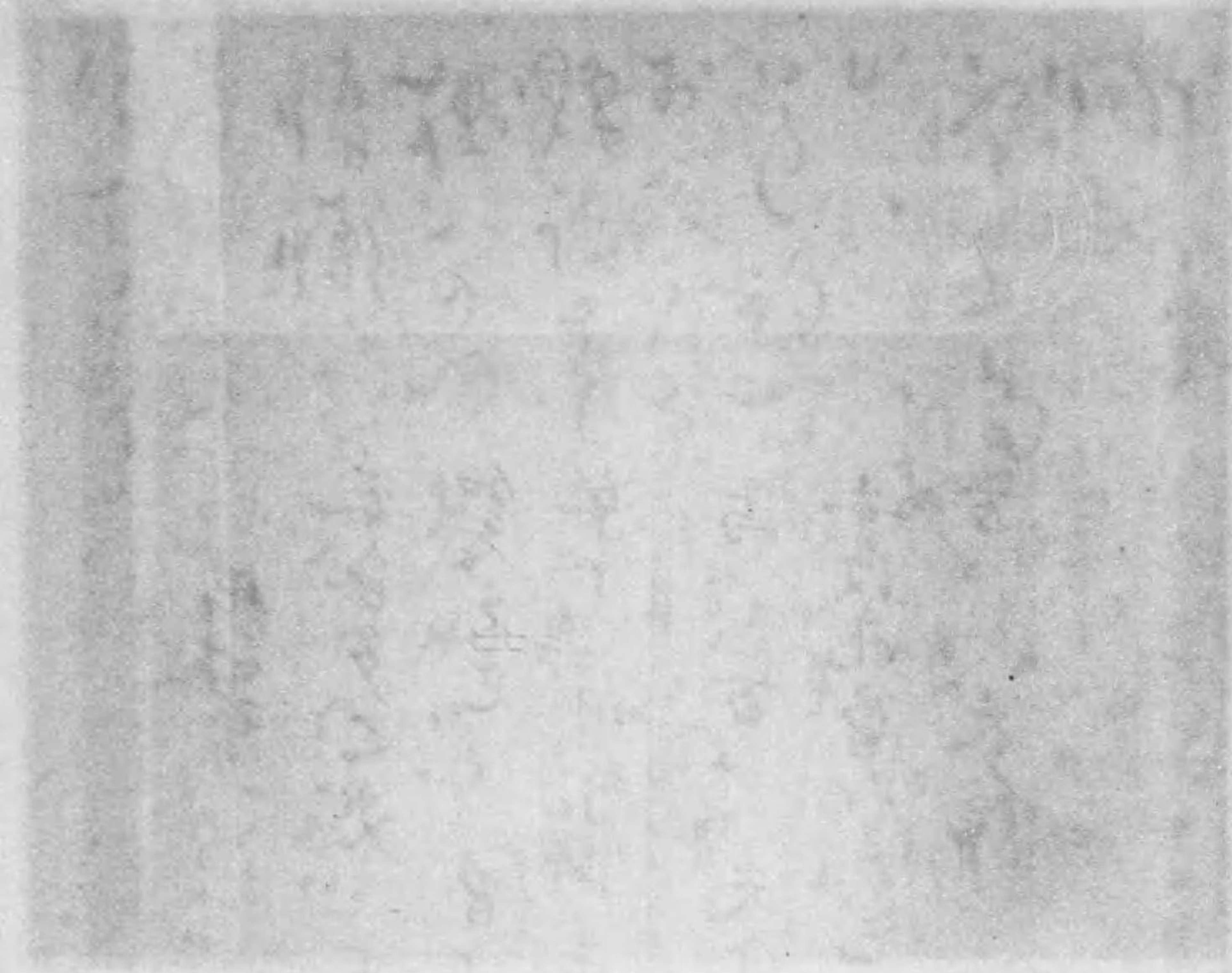
与万天介利

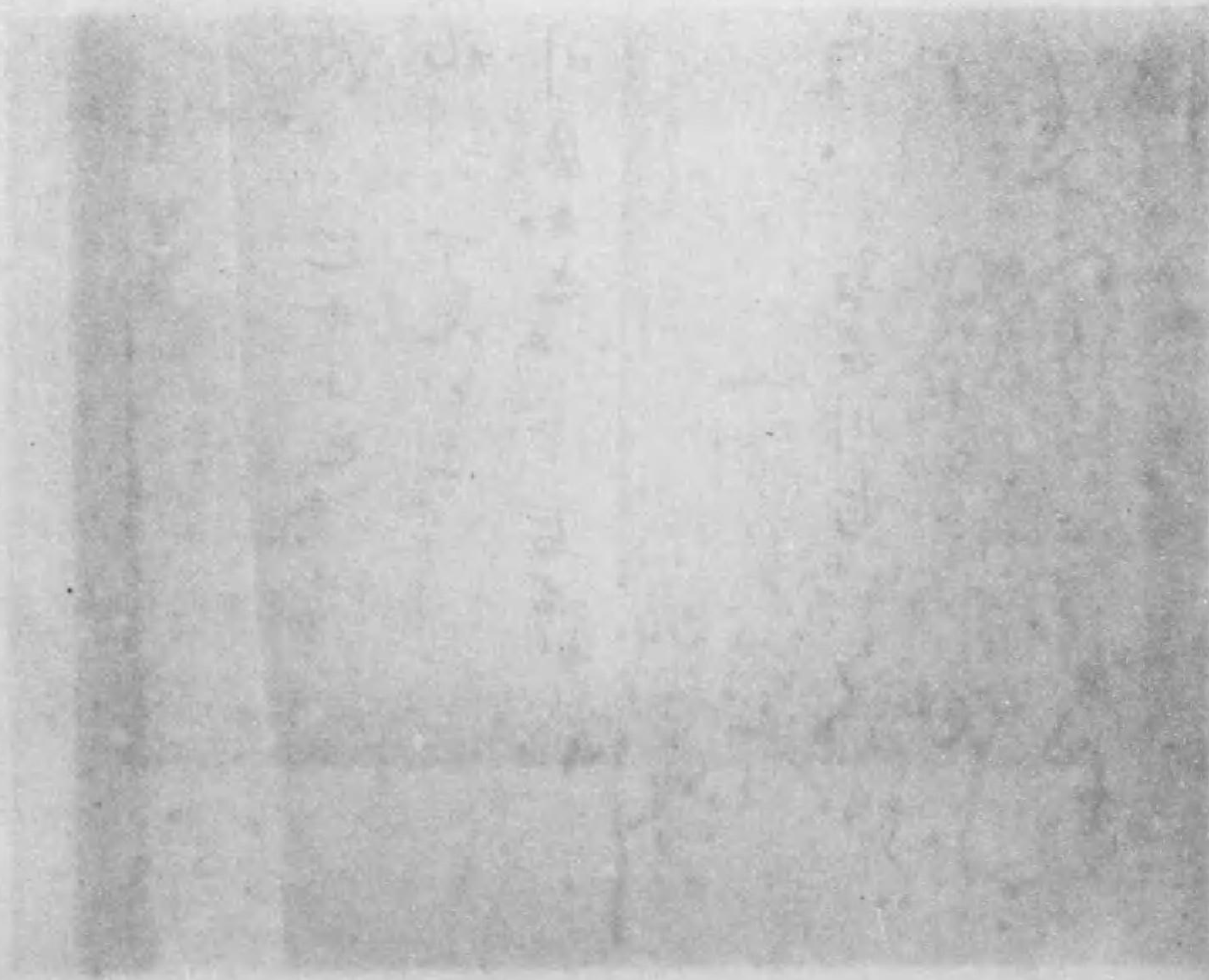
安波礼曽巳与之也与呂川与

万天尓利









新涼[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

近日[illegible]
[illegible]
松井生[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

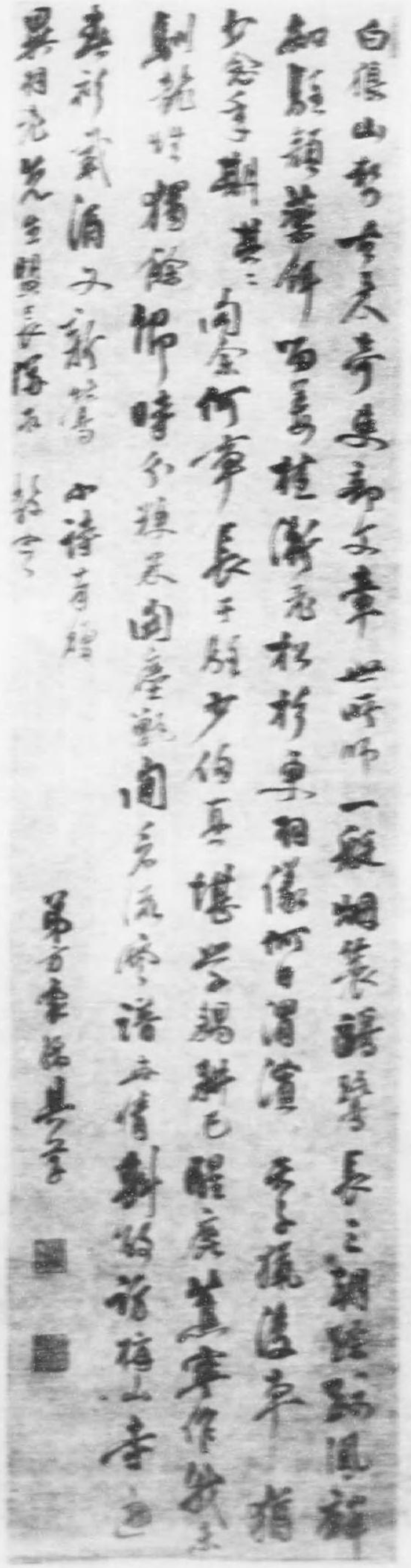
正月[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

護所願悉得佛説是經時天龍鬼神帝王人
及四部弟子有三億人見佛説是經皆大
歡喜嘆未曾有各發无上正真道意前以
頭面着地作礼奉行
佛告阿難汝諦聽受持廣宣流布令一切衆
生有形之類受持讀誦書寫供養佛之要
法能除无數劫極重之罪能度无量无邊阿
僧祇衆生悉得解脱此經佛口中所出有
讀一句一偈讚嘆之者衆邪惡道一切惡
鬼不得來近壽命正長終不横死所欲求
者如願悉得説是經時一切大衆及諸龍鬼
於四部弟子頂礼佛足受天尊教一心奉行
寛元二年十二月十五日 信士張阿宜寫護身命經受持讀
誦供養經上及七世父母下及已身皆識善喘之道

次第乞已還至本處飯食
訖收衣鉢洗足已敷座而
坐
時長老須菩提在大眾中
即從座起偏袒右肩右膝
著地合掌恭敬而白佛言
希有世尊如來善護念諸



障拜璽恩亦
祁祀諸亦
禮若百闢示

孔子玄德煥
炳光於上下
本國舊居復

禮之日闕而
不祀誠
朝廷聖恩所

子重

美玄無與

影響豁谷晝昏碧
霧藂煙欝古今
之色玄黃絳雪
暎冬夏之[illegible]其

旋玉也則風
溥露是油雲
膏雨漸起玄[illegible]
仁也則蛻殼蟬

何客曰今者
薄暮舉網

得魚巨口細狀
如松江之鱸顧

安所得酒乎
歸而謀諸
婦婦曰吾有
斗酒藏之久

一翁開口喜雙童
童子喜心布袋中
内院人今在于此
松風寥廓率陀宮

癸丑嘉平倣一峯老人筆
南山積翠圖

書苑第六巻第二號　大正六年一月五日

書法十二意

滑川澹如述

平とは横を謂ふ也。
直とは縦を謂ふ也。
均とは間を謂ふ也。
密とは際を謂ふ也。
鋒とは端を謂ふ也。
力とは體を謂ふ也。
輕とは屈を謂ふ也。
決とは牽掣を謂ふ也。
補とは不足を謂ふ也。
損とは有餘を謂ふ也。
巧とは布置を謂ふ也。
稱とは大小を謂ふ也。

此の十二意なるものは、魏の鍾繇の說きたる書論の骨子にして、顏眞卿は此の訣を張長史より傳へられたり、と稱する所謂字外之奇なるものなり。

魯公が此の十二意に腐心したる逕路は、公自らの記する處に據れば、予秩を醴泉に罷め、特に東洛に詣り、金吾長史張公旭を訪ひ、筆法を師とせむことを請ふ。長史時に裴儆の宅に在りて、憩止すること已に一年たり、衆張公を師とし、筆法を求むるものあり、或は得るものあり、皆な神妙といふ。

僕頃ろ長安にあり、張公に師事すれとも、竟に傳授を蒙ることを得ず、人の或は筆法を問ふものあるも、張公皆な大笑して之に對し、便ち草書もて、三紙或は五紙を書興するのみにて、竟に復た其の奥旨を得るものあらざる也。予の再び洛下に遊ふや、相見て歡甚、依て裴儆に問ふ、足下長史に師敬し、何の得る所かある、儆曰く、但た絹素屏數本を得たるのみ、又た嘗て共に筆法を論せむことを請ひしに、惟だ言ふ、倍ゝ工學を加へ、書法を臨寫せば、

丁巳開歲之辭

天休申命爰開丁
巳之端陽氣發祥
用錫億兆之福載
逢華旦欽頌開年

大正丁巳元旦

法書會同人恭喜再拜

當さに自ら悟るべきのみと、他を言はず。僕袁徽の宅に停まること月餘、袁徽の言に因りて、長史が容易に其の法を傳授せざるを識り、をりもがなと、其の時季の至るを俟つほどに、或る日長史の前に晉むで、僕是れまで先生の奬誘を承け、日月滋よ深く、夙夜勤めて怠らず、心を翰墨に潜溺せしめしも、未だ筆法の奥を聞くことを得ず、倘し筆法の要訣を聞くことを得ば、豈に感藏の誠に任へむやと、長史此の言を聞き、良や久しく言はず、左右を顧眄して怫然として起つ、予乃ち從ふて行く、東竹林院の小堂に歸り、張公堂に當り、床に踞し、乃ち僕に命じて小榻に居らしめ、乃ち口を啓て曰く、筆法元微、妄りに傳授し難し、志士高人にあらざるよりは、詎んぞ其の要妙を言ふべけむ、今ま以て子に授く、須らく妙を思ふべきなりと、卽ち十二意を提して曰く、

夫れ平を横といふ、子之れを知る乎。僕沈思して對て曰く、嘗て先生の數を聞くに、一平畫を爲くる毎に、須らく縱橫象あらしむべしと、此れ豈に其の謂にあらざるかと、長史乃ち笑ふて曰く、然り。

又た曰く、夫れ直を縱といふ、子之れを知る乎。曰く、豈に直なるものは、必ず之れを縱にし、邪曲ならしめざるの故にあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、均を間といふ、子之れを知る乎。曰く從前垂示を辱ふす間光を容れざるの故にあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、密を際といふ、子之れを知る乎。曰く、築鋒して筆を下し、之をして疎ならしめざるの故にあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、鋒を末といふ、子之れを知る乎。曰く、末は以て畫を成すといはず、其の鋒をして健ならしむるにあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、力を骨體といふ、子之れを知る乎。曰く、點畫皆な筋骨あり、筆を趯して之を作り、字體をして自然雄媚ならしむるを謂ふにあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、轉輕を曲折といふ、子之れを知る乎。曰く、豈に筆を鉤し、角轉し、鋒を折して輕過するを謂ふにはあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、決を牽掣といふ、子之を知る乎。曰く、豈に筆を牽掣して擊法を爲し、決意して鋒を挫き、極めて陰峻にして佳滯ならざらしむるを謂ふ乎、曰く、然り。

又た曰く、補を不足といふ、子之れを知る乎。結構點畫、或は趣を失するものあるときは、別點旁畫を以て之を救ふを謂ふにあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、損を有餘といふ、子之を知る乎。趣長筆短、意氣餘りあり、而して畫は足らざる如きを謂ふにあらざる乎、曰く、然り。

又た曰く、巧を布置といふ、子之を知る乎。書せむと欲すれば先づ字形を預想し、布置をして平穩ならしめ、或は意外體を生じ、異勢あらしむ、是れを巧といふにあらずや、曰く、然り。

又た曰く、稱を大小といふ、子之を知る乎。豈に大字は促して小ならしめ、小字は展べて大ならしめ、以て茂密ならしむをいふにあらずや、曰く、然り、子の言頗る筆意の正法を得るといふべし。

是れ魯公の述ぶる筆法十二意にして、此の法たる、管を握り、紙に臨むに於て、尤も細心の要意を下さゞるべからざる書道の條規となす。書なるものは單に執筆運筆のみに溺したりとて、以て其の能事を轄せりといふにはあらざるなり、間架結構の如き書道の末技なりといふ人ありと雖とも、抑間架結構ありて、而して後位置を生じ、位置正ふして、而して生動の妙を生ずることを知らば、此の十二意は、書道研究者としては、必ず翫味せざるべからざる法規なりとす。

書學經世論

樋口銅牛

或人の曰く。書は以て姓名を記するに足れば足る。書何ぞ世を經綸するに足らむやと。予曰く。然り。足下の言の如し。普通人にありては、尋常通行文字の結體を論じて、之を筆に揮寫するを得ば、其の巧拙の如きは、固より問ふべき所に非ず。拙なるの巧なるに如かざるは論なしと雖も、拙なりとて敢て日常の事を缺くべきにはあらず。書の巧拙が人心に與ふる所の快不快の念には多少の影響もなきにあらずと雖も、此は是れ別途の方面より研究すべき問題に屬し、書本來の面目として、人々必ず書に巧ならざるべからずと斷定せしむるほどの材料とはなり難し。若し天下の人悉く書に巧なりせば、世に書家なるものゝ取り立てゝ持て囃さるゝ理由なく、世に書家なるものゝ持て囃さるゝ限り、一面より見て、世間一般の人は、概して書に巧ならざるの反證とすべし。

文章經國は、人皆之を知る。殊に言論の自由にして、思想の著しく發達せる今世に當りては、文章經國の力は最も偉大なるものなるを認むべし。此の文章經國といふ裏面には、書の力も幾分認むべからざるにも非ざるべく、文章は筆の揮寫によりて成るものには相違なかるべきも、文章の組成分子は言語と文字卽ち是れにして、書其物は直接何等の效果を及ぼすべきものにあらずとせば、文章經國に對する書の力は、頗る貧弱なりとせざるべからず。

然らば則ち書は毫も經世に裨補なきものとして、經世家の雲煙過眼し去るべきものなりや。否。否。然らず。書が經世の要具として其力最も大なりとは、吾人敢て斷言するを憚ると雖も、書を以て毫も經世に裨補なきものとして排斥し去らむは、吾人の聊か躊躇する所ならずば非ず。功利一方の眼を以てせば、書は固より經世に裨補するに足らざるべきも、人間の欲求は單に功利のみなりとは斷じ難かるべく、衣食住の肉體生活以外に精神上の欲求といふもののなくばあらず。卽ち精神は美を欲求し、快を欲求す。同じ衣食住にも、衣は體を蔽ふに足るのみにては滿足する能はず。食は腹に滿たすに足るのみにては滿足する能はず。住は雨露を凌ぐに足るのみにては滿足する能はざるは人の性にて、言語あれば玆に文字あり。文字あれば玆に書あり。書あれば書によりて美的快感の欲求を催起するは、人性自然の趨向ならずばあらざる也。無用の用此に於てか存し、書が經世半面の要件は、此に於てか成立することゝなる。乃ち天下の人々悉く書を善くせざるべからずとの消極的斷定は下し難きも、積極的に人々皆書を善くせむとの希望あるは之を否定する能はざるべし。假令ひ人々自ら書を善くする能はずとも、人の善書を見て之を喜ぶの心、卽ち美的感性の享受は、人々に通有せりと斷定するを得べし。

文章經國といふも、經國の文章、豈獨り時務的論策のみを指して之を謂はむや。文人詩人の感興情趣の作品も亦經國文の一種として之を數ふるを得べし。何となれば甲と乙と人心を刺戟するの方面こそ異なりたれ。人心を刺戟するの程度に於ては敢て軒輊する所なければ也。唯書には其の揮寫する所の文字に成形あるがために、創作的分子の乏しきを憾とすと雖も、成形ありて之れを模するものは、畫も亦然らずや。書と雖も分行布白、間架結構の間、猶創作的意匠を施すの餘地乏しからざるのみならず。用筆の如何によりて、筆者の氣分の現はれ方に大に逕庭あり。書豈藝術的作品たらざるの理あらむや。乃ち實用の方面を離れたる書家の位地は、他の文人詩人乃至畫家と比肩し得べきや論なし。

嬴秦の社稷は、二十八年を保つに過ぎざりき。天下一統の功は秦皇に歸せざるべからずと雖も、六國をして長く並立すべからざるものならしめば、之を併合するものは、必ず秦のみとは限るべからず。齊・楚が之を統一したりとも、天下に於ては增損する所なし。たま〳〵秦が之を併合し得たるは、地の利によりたる僥倖のみ。我の強くして勝ちたるに非ずして、彼の弱くして破れたりとも評し得む。予は秦の統一宰相李斯を謳歌せずして、寧ろ小篆の書家としての李斯を憧憬す。漢の天下は久しかりき。而も予は書家蔡邕一人の名に於て印象最も深し。魏の曹操は、治世の奸賊、亂世の英雄。其の人に取るべきありとせば、帷中孫吳を注せし點にあらむ。予は書家鍾繇ありしを魏一代の名譽として之を推さむと欲す。東晉の社稷は、江左に偏安して、復た北征の氣力あるなし。若し王右軍の臨池に振ふなくば、東晉何ぞ言ふに足らむや。六朝は隋に到つて統一せらる。故に隋碑には見るべきもの多し。虞世南も亦隋より唐に及びたる人なり。唐初には書家最も振へること人の知れるが如し。余は歐陽

鞠の矛戟森々たるを落よ。荒を叢せる太宗李世民の雅懐は其書の雋秀によりて雄に之を蔽ふに足らずや。顔魯公は書に於て一機軸を出し一生面を開きし人なり。魯公をして不朽ならしむるものは其の忠魂義魄もあらむも予は寧ろ書に於て取る所あらむと欲す。五季の初に楊凝式あり。余は其書を喜ばずと雖も喜ぶものは大に之を推重す。亦五季の一紀念たり。宋に書家なし。南宋殊に然り。然れども北宋に於て蔡襄、黃山谷蘇東坡は一頭地を拔ける書家なること爭ふべからじ。元の世襲は凡十年。胡人にして漢人を統治す。漢民族の恥辱の歷史なりと雖も書畫の大家を出せるは一奇と曰ふべく、元の御象は書畫のために炳焉たり。明の書家は文徵明董其昌最も著はると雖も其他にも之と拮衡するに足るの書家乏しからず。明の歷史も書家によりて光彩を發せりとせむ。清朝又胡人の天下なり。華書に於て明人に及ばずと雖も篆隸に於て舊季の面目を一新せよ。其功豈沒すべけむや。

我邦に於ても聖武帝光明后の臨書の妙は更にも言はず。空海、逸勢、佐理、道風、藤原行成の如きは筆蹟の神に入れるものといふべく、我邦の文藝史上に重きを爲すこと幾何ぞや。物徂徠は功利派の學者なりき。而も其の書には神采の奕々として雄大豪宕なる其人の面目躍如たるものあり。僧良寬、龜田鵬齋は德川期三百年間の雙璧とすべく、明治至運の勃興するに及びて副島蒼海伯あり。中林梧竹あり。梧竹は殆と書の化身といふべく、書が梧竹か、梧竹が書か、書を離れて梧竹なく、梧竹を離れて書なし。蒼海伯に於ては、臺閣に於ける顯名よりも、寧ろ其の書の不朽なるべきを信す。

諺に曰く。詩を作らむよりは田をつくれと。實利の方面より言へば、固より然るものあり。然れども又『六十の手習ひ』といふ諺あるにも想ひ到らざるべからず。人間衣食に足れば、更に其の上の何物をか欲求す。否な衣食に窮しても、衣食以外何物か之に代るべきものを求めて生きむと欲す。精神生活向上の機徵は此に存し、精神生活の向上は、此れ趣味生活の向上にして、趣味生活の向上は此れ人格の向上なり。向上の一路に、書も亦到底缺席の羅針盤たり。書畫趣味に神補なしとせむや。

多聞室叢談

輪人

(二) 沙吒利

予、今春舍弟の爲めに沈石田畫冊の跋を作る、其の一節に『乙卯暮秋輞鄰皎亭書腸、稻神物莚之輩、不妻沙吒利手也』といふ句あり。然るに此の沙吒利といふ事に就き、人の推問を請けしこと一再に止まらず、而かも其の事實は極めて面白きことなるを以て、爰に開陳することゝなしぬ。

唐の天寶の末に、韓翃といふ人あり、素と昌黎の生れにして、頗る才名を負ひ、殊に詩に於ては尤も重名を恣にしたりしかども、孤貞靜默、且つ性頗る落拓、常に蒂門圭竇、貧に食して厭ふこともなかりき。其の隣家に、李生といふ人の毀人にて、柳氏といふ美婦あり、李生柳氏を訪ふ毎に、いつも韓翃を邀へて飲を共にせり、韓も李の磊落たる大丈夫なるを以て、其の意に逆はざることに黽む、交を嬲するに及むで、柳氏壁隙より韓の居る所を窺ふに、蕭然として甚だ貧なる如くなるも、其の常に往來する所の士は、咸な當世知名の人のみなりければ、柳氏は閒に乘じて李に語りていふよふ、韓秀才の窮するや甚し、されど其の交遊名人のみなれば、決して久しく貧賤なるものにあらず、宜しく假借して之が力となるべしと、李生も實にと之を領ひ、或る日の事、佳饌を具し、韓を邀て共に飲み、飲酣なるに及むで、韓に謂て曰く、秀才は當今の名士、柳氏は當今の名色、名色を以て名士に配すといふ事は、尤も其の當を得たるものと思考す、とて遂に柳氏をして韓に從ふて坐せしむ、韓も此の不意の措置に痛く驚き、再三辭讓したるに、李の曰く、大丈夫杯酒の間に相逢ふ、一言道合へば、相許すに生死をも以てす、況むや一婦人何むぞ辭するを須む、且つや秀才貧窮以て自ら振ふによしなし、然るに柳氏には數十萬の資産あり、之を以て濟を取る亦た可ならずや、柳氏は殊に激人の資性、宜しく夫子に事へて其の操を全ふすべし、とて即ち長揖して去りぬ、韓追ふて之れを讓るも、亦た思へらく、李君は負氣豁落、辭するも肯すべきものにあらずと、終に柳氏と共に同棲することゝなしぬ。

翌年に至り、遂に進士に舉げらる、時に淄青の節度使侯希逸奏して從事となし、幕下に延きて文書を掌らしむ、されど此の時既に世は何となく騷がしく、何時大亂の興るやも謀られざる有樣なりしかば、柳氏を拉して赴任することを見合せ、之れを都下に置き、更らに時日を尅して迓ふることを約して去りぬ。韓生は斯くして任地に赴きたるも、軍書旁午、寸暇とてもあらざりしかば、忘るゝといふにはあらざれど、空しく三年の歲月をば過ぎ、尙ほ之れを迓ふべき機會にも遭遇せざりし程に、一日練囊を買ひ、詩を題して寄せて曰く、

章臺柳章臺柳。往日青々今在否。縱使長條似舊垂。亦應攀折他人手。

柳、詩を見て復書して曰く、

楊柳枝。芳菲節。可恨年々贈離別。一葉隨風忽報秋。縱使君來登堪折。

柳氏は元來色藝をもて、其の名都下に喧しかりければ、世亂に遭ふては、到底節を全ふすること能はざるを覺り、寧ろ落髮して尼となり、世を遯れむかとも思ひしかど、終に其の機を見出すこと能はざりしうちに、蕃將沙吒利なるものゝ爲めに劫し去られ、其の寵愛は專房ともいふべき程に、一時も傍を去ること能はざりき。

然るに韓生は、其の內侯節度と共に入朝し、頻りに、柳氏の居址を物色したりしが、杳として其の隻影をも見出すこと能はざりき。

韓翃の失望幾許ばかりなりしか、悵然として樂まざること累日、或る日のこと、中書に入り、子城の東南角を過ぎりし程に、一犢車に出逢ひぬ、車中より聲ありていふ、そこに行かるゝは、青州の韓員外どのに候はずやと、車簾を掲げて首差延べる人を見るに、是れなむ、尋ね侘きたる柳氏にてありければ、夢にはあらずやと呆るゝ程に、柳氏も亦悲喜交々至り、己れの沙吒利に失身して、遯れむすべも無き有樣をば、詞短かに語り畢り、是非に明日此の路頭にて、今一度相見ばやと相約して去りぬ。

明くる日、韓生は約束の時刻に、昨日の子城路に至りしに、又も犢車は緩く轍を輾りつゝ來りて、車中より一紅巾に一合子を包み、香膏をば實てたる器を投じ、涙と共に別れを告げて、最早や再び見ゆるの期もあるまじ、これぞ終身の永訣ならめといひて泣き別れぬ。

韓生も其の悲は同じこと、身も世もあらぬほどに泣き崩れてぞ別れける。是の日や、臨淄の將校連中は、都市の酒樓にて大宴を催すことの約あり、韓翃も之に招かれ居たれば、心ならずも赴きたるに、心に憂き事あれば、自然に面白からぬ色現われて物思に沈み居たり。一座の人々は韓生の何時に似氣なく、悒々として樂まざるを見て、韓君は風流の士、談笑論議に長けたる才士なるに、何故に今日は慘然として浮きたる樣も見へざるにやと訝かり居たり。韓翃はありし事の一伍終始を物語りたるに、虞侯の配下にて許俊と呼べる年少士官あり、酒の機嫌にて此の物語を聞き、慷慨耐ゆることは能はず、吾も平生義烈を以て許したる一人なり、友の悲を見るにつけ、又た沙吒利の理不盡なる行爲を憤りて、などか默思することの叶ふべき、韓員外に向ふて、手筆數字を得むことを望み、若し手筆を得るに於ては、必ず柳氏をば取り返すべしと誓ひたり。一座のものも其の義風に痛く感心し、韓生も斯くなる上はとて、一紙の手筆を與へければ、許俊は急ぎ結束して鞍馬に鞭を加へ、別に一頭の馬を牽かせ、驀地に沙吒利の營所を指して馳せ向ひぬ。

間も無く陣營に至り、大音に呼りていふには、今將軍は途中にて馬より墜ち、生命もいとゞ危き程に、急ぎ柳夫人を迎へこよとの仰なり、猶豫すべきにあらずと呼りければ、皆々驚き騒ぐうちに、柳夫人も出で來りしかば、直ちに韓生の手書を示し、挾むで馬に上り、鞭を加へつゝ最前の酒樓に取りて還りたるに、一座の酒宴は未だ終らずありし程に、柳氏を以て韓生に授けて曰く、幸に命を辱かしめず、斯く柳夫人を連れ返りたれば、御請取ありて然るべしと申出たるに、一座のものも、其の奇智と膽勇とに舌を捲きて

驚き合へり。

柳夫人は斯くして取り返すことを得たれども、爰に尤も氣遣はしきは沙吒利にて、彼れは大なる勳業を立て、代宗皇帝の御覺も目出たく、頗る驕り我儘なる行爲の多ければ、此の先き如何なることになり行くらむと、闔座眼と眼を見合せ、之を大將の希逸に申出たるに、大將は腕を扼し髯を奮はし、許俊は面白き事をなしてけり、余も弱年の頃には、隨分斯ることは好むでなしたるものなり、憎むべきは沙吒利よ、蕃族の身をもちて聊かなる勳功を立てたればとて、驕り我儘なる行爲をなすとは、其の儘には捨置き難しとて、直ちに表を具して、深く沙吒利の罪を責めたり。代宗之を見て稱嘆良や久ふし、御批して曰く、沙吒利には宜しく絹二千匹を賜ふべし、柳氏は韓翃に歸するを至當となすと。

此の韓翃こそ、人口に膾炙する

春城無處不飛花。寒食東風御柳斜。日暮漢宮傳臘燭。輕烟散入五侯家

を賦たる人にぞある。

北京武英殿の寶物（續）

後藤朝太郎

六　武英殿寶物の內容（つゞき）

武英殿に於ける寶物の一斑を示さんが爲め、殿內にて著しく人目を惹ける燒物、繡物、玉器並びに古銅器類につき、自分の見た所を少しく述べて見よう。

（イ）燒　物

武英殿の寶物中にて最も珍とすべきものは燒物で、其の石燒卽ち磁器には頗る精巧なものが澤山ある。磁器を最も緻密に且つ艶麗に應用して居るものは七寶の花瓶類であるが、七寶のことは少しく岐路に渉るから玆には云はぬ。自分の見た所では、燒物には時代の餘り古くない方のものに、逸品が多くあつた樣に記憶する。宋時代や明時代あたりの品は、唯氣韻が高いとか、落付きがよいとか云ふ點で、結構なものには相違ないが、若し其の技術の精巧な點から論ずると、新らしいものゝ方にそれが多い。別けても清初、康熙乾隆あたりより雍正にかけてのものは頗る綺麗で、何とも云へぬ手の込んだものが澤山に見受けられた。燒物に付いては複雜な技術が、必らずしも稱揚すべきでないかも知れぬが、然し其の器物の形に於て、曲線の現はし方に於て、花鳥その他の模樣の適用に於て、釉藥の懸け方に於て、或は無地ならば、其の色彩の出し方に於て、或は其のボカシ方に於て、燒く時の熱の程度に於て、兎も角非常な苦心の結果でなくては出てこない傑作が實に澤山陳列されて居る、其のうち素人目に特に目立つものの數點を左に紹介しやう。

◎明の花耳拱菊拱壺瓶　これは丈の細高い花瓶で、頸も長く、胴も長く、頸には一對の花序が耳拱となり、胴は上の方ふくらみ、下方に行くに從つて細く緊つてゐる。胴に現はされた摸樣は、氣持のよい花瓣の大きな菊花が、麗はしい曲線で示された莖の尖端に五六輪、或は高く或は低く現はされてゐる。そして葉はヅット下の方に小さく現はされて目立たないやうに書かれてゐる。これは餘程の逸品と思はれた。

◎明の五采鏤花壺瓶　これは七寶の作りで出來た、美しいそして手の込んだ花瓶である。圖柄は、逆卷く浪を幾重にも現はし、その間に何ともえたいの知れぬ蟠龍の如きものを示し、全體を派手に五色に使ひわけてあるだけに、頗る濃厚な感じを起させてゐる。

◎明の建壺達磨像　達磨の白磁立像で、その法衣の裾の海風に飜つてゐる所の軟い感じは如何にもよく出てゐる。達磨の足の下に、寄せては返す浪の渦卷きを現はしてゐるところは誠によく纏つて氣持ちがよい。

◎康熙の五采魚藻壺尊　これは花瓶で頸は短かく、胴はよほど長い形に作られてゐる。模樣は名の示すが如く鯉魚と水藻との圖案であるが、魚は鯉に似て鯉に非ず、おそろしく眼瞼の大きな魚である。それがたくさん現はされてあるが、一方を上に向かせ他の一方を下に向かせると云ふやうに交互に方向を變じて藻間に躍泳してゐるところが組立てられてゐる。

◎康熙の采繪梅棠式瓮花盆一對　これは一對の石燒の植木鉢であつて、その形は二者何れも六角形で、緣がとつてあり、脚も六脚面白く作られてゐる。彩色を施したる梅、海棠その他の瑞樹が六方の各側面に現はされてゐて品のよい作りである。

◎乾隆の料采旋轉綬耳壺尊　これは支邦式と云ふよりも西洋式と評すべき程のもので、全體は圓味があつて丈高からず、纏まりのよい感じを與

乾隆料采旋轉綬耳壺尊

へてゐる花瓶である。口の所には惹多模樣の如き圖案を繰返し、之を曲線の框のうちに收めてゐる。頸には菊花の如き花模樣を左右同形に配置し、胴は唐草その他の瑞草の模樣を巧みに出して、左右相似となし、中央に圓く地を拔き殘して、之に支那流の蓬萊山水を現はしてゐる。如何にも溫雅な氣持ちが見えて上品である。壺尊の底は更に捻り返しがあつて膨らんでゐて落ち付きが見えてゐる。又頸には綬耳があつて調子が大層よろしい。

◎乾隆の三彩壺瓶　この花瓶は頸は天に冲して長く（併し細からず）そして胴は蕪菁の如く橫にひろく膨らみ、底の方はよく緊つてゐる。そして之に紫檀の臺がついてゐる。枝の茂れる梅樹に澤山の瑞鳥を配し、如何にものどかな氣分と高潔なる詩趣とを現はさうとしてゐる。

◎乾隆の三管采繪山水人物寶月壺瓶一對　これは平扁なる一對の花瓶であつて、口三管あり、之に兩耳を付し、胴には圓形の地を作つて、之に巖上老松を現はし、松樹の下に二人の仙女と瑞鹿とを配し、さながら山東靑魯のあたりの古を寫したるかと思はしむるやうな圖である。

◎乾隆の采畫壺蓋罐一對　これは壺形蓋付きの罐で、頸のところに透しがある。透しは輪違ひに連環されたやさしい意匠で出來てゐる。蓋の方も同樣の意匠で出來てゐて、飽くまでも優しい作りである。壺形の胴のところには、四方に圓形の地を殘して、之に四季の山水を入れ、その四つの圓形以外の地には花模樣、唐草模樣を巧みに使つて優麗典雅の趣を十分に現はしてゐる。且つ胴の頸に接せるところには、雲形の連續模樣を浮き出してゐる、胴の底に近き方には澤瀉模樣に似た支那式の瑞草の模樣を現はしその下に更に花模樣を極くこまかく散らし實に品がよい。

○淸（乾隆か）の翡翠釉壺瑞獸　この燒物は置物である。獅子とか白澤とか云ふやうな形に見えてゐるが、或は案ふに唐時代に神獸として傳へられてゐた獬豸ではないかと考へる。その頸や尾のあたりに渦卷きを二三現はしてゐたり、又四肢に火炎を配してゐたりする點から考へると神靈的のものとして崇めてゐるものに相違ない。また背に豐かなる鬣を波立てゝ示してゐる所はその顏面殊に口邊の威嚴ある作りに調和してゐて面白く思はれる。その瑞獸の釉藥は翡翠釉と云つて、翡翠色の無地の藥がかゝつてゐるのである。

以上は九牛の一毛に過ぎぬ。而かもその十點の品評にしても僅にその外形上に現はれた一局部の紹介で、專門家に滿足を與へるやうな品評では勿論ない。

(四) 織物

武英殿陳列の織物には康煕乾隆雍正帝など清朝歴代の天子が即位式の時に使はれた精巧な衣裳類が多きを占めてゐた。中にも吾人の眼を驚かしたものは袞龍の袍が金色燦爛と文字通りきらびやかに現はされて、その龍の図案に色々細緻精巧な意匠を加へ、それに貴重なる寳石を無数に使つて織物の模様を助けてゐることである。嘗て袁世凱が皇帝の位に即くことが出來ると確信してゐた當時誂らへられてゐた即位式用の衣冠並に高御座式のものなどは、どれ位贅澤なものであつたか、武英殿のものを見ると想像がつく。孔子廟や天壇その他正陽門方面の壁や門の修覆徒抜に思ひ切つた費用をかけてゐた袁世凱の遣口から考へて見ても即位用の調度は國庫の經濟にかまふ所なく随分贅澤なものであつたことと察せられる。

武英殿の織物のうち珍物として特に指摘すべきものは緙絲の壁衣である。緙絲壁衣とは日本人の目には一種のゴブラン織の如きもので、太い糸を織り出して之を浮いたやうに見せ、之に各種の彩色を施して濃厚奇抜なる而かも精巧驚く可き畫を描き現はしてゐるのである。勿論これらは宮殿の壁掛に作られたもので、南方から貢物として清朝の宮庭に獻納したものか、それとも早い時代に外國から支那へ輸入したものかと疑はれる圖柄である。緙絲の圖案中には『松鶴靈芝圖』の如き、また『金山圖』の如き、支那式の趣味をそのまゝ現はされてゐるものが甚だ多い。尤も支那とは全然別の關係で南國の趣を現はしたものも亦少なくない。今その一例として『鳳輦圖』とも稱すべきものゝ圖柄を見るに、輦の梶は二柱に圓蓋を繫し、轅は二本にして車の後方に長く延びて末端相合し、車両に入る踏臺は前方に在りて半圓形をなしてゐる。輪は雙輪にして轂を中心に四つの半圓をなす輻を有す。此の鳳輦の後方には更に高き臺座あり、之に王と女王と思はるゝ貴人が椅子に憑り、手に文書を捧げて讀み上げてゐるらしいとこが現はされてゐる。王の後方に屏風の如きものを立て廻はし、頭上には高く方形の屋蓋あり、之に旗竿をかざして長旌を風に靡かしてゐる。鳳輦と王者とが圖の中心となりて之に熱帶樹が配せられてゐるのであるが、其樹木の上に高く婦人の首が掲げられてゐたり、後方遥に二重屋根の樓門があつたり、その奥に印度のパゴダ式の高塔が聳へてゐたり、其の門前には馬上の人や、管笙を目深に被つた人、長柄の傘をたたんで高く肩にかざして歩いてゐる人などが示されて居て、この圖はどうしても支那人の意匠に成つたものとは受取れない。未だ十分の研究は經ないが南國の習風を寫したものであること丈は云へる。其他南國、御前奏樂圖とでも稱すべき樣な圖柄に出來て居るものもある。此等の圖案はたしかに外國人の意匠に成つたものに相違ない。(未完)

◎墨木幹事の歸朝　本會幹事墨木欽堂君は東京帝國大學文科大學長文學博士上田萬年氏と共に昨年十月二十三日神戸解纜の便船に搭じて支那漫遊の途に上りしが豫定の行程を經て上海に出で舊臘十五日同港より乗船同二十日夜博士と手を携へて恙なく歸朝せられたり漫遊の土産は君が椽大の筆を藉りて今後本誌上に現はるべきを信す。

大正六年一月二日印刷
大正六年一月五日發行

定價金壹圓

不許複製

編輯者　東京市本郷區駒込林町百六十五番地　黒木安雄
發行者　印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷
印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　金屬版印刷所
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所
電話下谷七〇六番
振替口座東京五九〇壹番
東京市神田區佐久間町一丁目一番地　法書會

振替口座大阪二四六三四番
京都市上京區寺町通丸太町南入　法書會京都支部

電話土佐堀(長)七八四番
振替口座大阪一二〇一五番
大阪市西區靭上通二丁目八十番屋敷　法書會大阪支部

恭賀新年

丁巳正月元旦

昨年中ハ非常ノ御愛顧ヲ蒙リ難有奉存候尚本年モ舊ニ倍シ御引立ノ程奉願候

西東書房主　七條愷

改版精印本の提供

中村不折先生愛藏　玻璃版精印

出土初本拓　孔子廟堂碑帖

法帖仕立　縦壹尺　横五寸三分
定價金貳圓五拾錢　送料金八錢

唐の虞世南は六朝の書風を集大成して、唐楷の一格を開きたる大家なり。此の大家の手に成れる孔子廟堂碑は、士大夫文人の爭ひ拓せるが爲めに、唐の時に於て既に磨損して土中に埋沒せしが、近年山東曲阜の一土民、偶然地を掘りて之を獲たり。此の帖は即ち其の出土の原石より拓したるもの、字形稍や痩せたりと雖も然も唐代の遺石なり。筆意秀潤にして人の眉字を撲つの概あり。

孔固亭秘藏　玻璃版精印

宋搨官本十七帖

法帖仕立　縦壹尺　横五寸二分
定價金貳圓五拾錢　送料金八錢

王右軍の蘭亭叙に次で其の種類の多きは蓋し十七帖なるべし、然も多くは摹の摹にして、眞の宋搨に係るものは極めて罕なり。近者孔固亭主人不折先生の獲られたる此の一帖は、墨光紙質高古蒼潤にして、宋搨官本たること毫も疑を容れず。依て先生に請ふて之を玻璃版に付し、以て同好者の机右に頒つことゝせり、希くは速かに一本を求めて王右軍草書の神髄を窺はれよ。

長尾雨山先生愛藏　玻璃版精印

陽明山人　若耶溪送別詩冊

法帖仕立　縦一尺八分　横五寸五分
定價金壹圓五拾錢　送料金八錢

王陽明は固より翰墨の小技に屬心するが如き小人物に非ずと雖も、書をして果して人格の表示ならしめば、此の偉大なる人格ありて、始めて其の書大に貴ぶべき也。此の若耶溪送別の詩冊は、孝宗の弘治十七年四月望、陽明が三十三歳のとき、都下の寓舍垣南草堂に於て作られたるもの、筆致雄勁にして且つ渾厚なり。左れば一たび之を披けば、恰も陽明その人に對するが如く、頓に心胸の豁然たるを覺えしむ。

多田親愛先生眞蹟

十二月花鳥の歌

桐表紙折本仕立　縦七寸　横二寸五分
定價金六拾錢　送料金八錢

明治年代に於ける假字書きの名手を求むれば、蓋し多田親愛先生の右に出づる者なかるべし。先生の筆は如何にも流麗にして些の澁滯を見ず、實に千蔭以降の第一人なりとす此の帖は先生か正月より十二月に至るまで、花鳥の短歌各一首づゝを書き連ねて門人某に與へられたるもの、假名手本として最上乘のものたるを信す。

發行所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　西東書房

法書會顧問日下部鳴鶴先生題簽
說文會講師高田竹山先生校閲
文學士後藤朝太郎先生校閲

大槻如電先生序文
文學博士大槻文彥先生序文
法書會編輯部纂

袖珍 五體字類 附 假名寶鑑

縦五寸四分 横二寸八分 總紙數七百三十頁
總クロース裝穎脊金文字入 寫眞金屬版精印

定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

楷行草といひ、篆隷といひ、各體字書の從來世間に流布するもの甚だ鮮からずと雖も、其の正確にして而も便利なる、此の五體字類の如きは未た曾てこれあるを見ず。本書は元來普通日用の便に供するの目的を以て編纂したるが故に、楷行草の三體を主眼として篆隷を附從とせり、隨て採收したる漢字も亦日用に適切なるものゝみなれば、其の數四千四百七十八字に過ぎず、敢て多數なりと云ふに非ざれども、然も各體に涉りて扁傍及び結構の變化したるものを悉く網羅したれば、重文に至りては其の數實に四萬五千貳百〇三字の多きに及べり。而して每字何れも原形を摹取して、一々其の出所若くは書寫人名を記注し、且つ附するに假名寶鑑と題して、變體假名一千四百七十二字を以てしたれば、其の重寶なること他に其の儔を見ず。

本書は精巧なる寫眞金屬版を以て縮刷したるものなれば、其の外形は小なりと雖も、其の內容の豐富正確なるに至りては實に驚くべきものあり。左れば本書一部を備ふれば、楷書に於ては石經・五經文字・九經字樣・干祿字書・楷法遡源。行書に於ては行書類纂。草書に於ては草叢・草露貫珠・草字彙。隷書に於ては顧南源の隷辨。篆書に於ては徐鉉の說文。また假名に於ては假名類纂・和翰名苑等の諸書を坐右に具備する以上の効力と便利あり。加ふるに說文の泰斗高田竹山先生及び音韻學の大家後藤文學士の嚴密なる校訂を經て、正字俗字古文後世字等を悉く明かにし、從來使用の誤れるを正したれば、本書は實に此種の字典中の白眉にして、一般學生は勿論、會社銀行等に於て事務を執る者も亦必らず一本を懷中するの要あり。

發行所 東京神田佐久間町一ノ一 振替東京五九〇一番 法書會出版部

山本梅逸筆 孔固亭藏 玻璃版精印

南畫楷梯

第一集 拾貳葉 疊紙入

定價金壹圓 送料金八錢

書畫もと一致なり、從て近來書道の勃興に連れ、所謂文人畫に筆を染めんと試るもの、都鄙を通して漸く增加するの傾向あり、而して實際師に就て其の道を問ふものは格別、然らざる者は何れも其の門に入るべき恰好の楷梯なきに苦むもの、如し。依て弊房は此の要求に應ぜんが爲め、今囘孔固亭主人に請ふて、其の愛藏に係る山本梅逸筆の南畫手本を精巧なる玻璃版に付し、展觀學習の便を計りて之れを疊紙に收め、以て初學者の高需に應ずること、せり。梅逸は人も知る如く、京都にありて中林竹洞と其の聲名を爭ひたる近代の妙手にして、山水人物花卉禽獸を畫くに、筆を援て立ち所に成り、其の布置の精巧なる、其の筆致の輕妙なる、實に人をして嘆賞禁ずる能はざらしむるものあり。殊に此の一帖は梅逸が初學の門下生に畫き與へられたるものにして、各種の樹木岩石より山水の結構に至るまで、秩序を逐ふて親切に揮毫しあれば、一たび之を机右に備へて臨摹するに於ては、如何なる初學者と雖も、容易に其の門を窺ふことを得べく、南畫手本として實に無双の指南車たり。

發行所 東京神田佐久間町一ノ一 振替東京七三七番 西東書房

終